特定非営利活動法人
アジア・アフリカと共に歩む会
南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2018年

・2018-12-25 2018年図書事業のご報告
・2018-10-14 大学生の現地訪問記②　自然とともに生きる人たち
・2018-10-13 大学生の現地訪問記①　食育の重要さ
・2018-09-17 南アから学ぶこと「ほんもののrespect」
・2018-08-22 アパルトヘイトで寸断された農業を「生きなおしている」人たち②
・2018-08-11 アパルトヘイトで寸断された農業を「生きなおしている」人たち①
・2018-07-27 農業塾卒業生へのアンケートとインタビュー
・2018-07-18 7月14日TAAA講演会レポート
・2018-07-07 2018年6月（17日～25日）現地プロジェクト訪問報告
・2018-05-19 パソコン・プログラムのリーダーたち
・2018-03-06 2月22日図書研修会イベント
・2018-01-28 学校菜園のアンケート調査を行いました

2018-12-25　南アフリカ

2018年図書事業のご報告

今年2月末に外務省日本NGO連携無償資金協力事業（N連事業）による図書事業が終了し、3月よりTAAA独自の図書事業として先行事業対象校を巡回訪問している。特に力を入れているのは図書委員会生徒の自立した活動へのサポートと活動継続へのアドバイスで、新メンバーが活動内容を理解して自主的に活動を推進できているかのモニタリングを行っている。

図書活動は基本的に司書教師の力に頼るところが大きいが、司書教師が1人で頑張っても逆効果で、生徒の力を信じて任せることができる学校で活動が進んでいる。どの学校にも必ず時間さえあれば図書室に飛んで来て本を読む生徒がおり、読書を楽しみ、本から学び、他の生徒への読書促進を行う姿も見られる。

N連事業では対象校の図書室にノートパソコンを設置してリソースセンターとし、生徒にパソコ

ンの基礎的な知識と使い方を指導した。今年度は図書委員会生徒に指導し、学んだ生徒が他の生徒に教えるピア教育の方法を取り入れて活動の継続につなげており、生徒がリーダーシップを身に付けることにも役立っている。今年度TAAA図書事業としてパソコンの寄贈と指導を行っているヴェルメメゼ小では、学年末までに図書委員会生徒がパソコンの基礎技能を学び、新年度には図書委員会新メンバーへの活動の引き継ぎとピア教育でのパソコン指導を行う。

　ベキズィズウェ小は在南ア日本大使館の草の根支援をいただいて3教室を建設し、うち1教室に本棚と書籍を設置して図書室とし、現在では生徒が読書やリサーチ、パソコン学習等に利用している。フンデドゥーゼ小は以前スペース不足のため独立した図書室の設置ができず、図書活動がなかなか進まなかった。コンテナ図書室の設置後、図書委員会を立ち上げ、司書教師および委員会生徒への研修と活動のモニタリングを経て、図書室内で本の貸出しや生徒のリサーチなど様々な活動が行われるようになった。
　また州教育省図書部門（ELITS）から蔵書の補充も受けて活動が充実してきている。TAAAはELITSと共に学校図書活動推進を行っており、双方のイベントやプログラムへの参加、情報共有を通して協力体制が確立された。

　これまで図書活動の経験のなかった学校で図書室が有効に利用されるようになるまでには、１．活動のベースとなる図書室の設置と蔵書の配備、２．図書委員会の設立とメンバーの選出、３．司書教師および委員会生徒への研修、４．本の貸出し等活動のモニタリング・アドバイスと学校内での読書推進活動、５．学年末（12月）から新年度（1月）の引き継ぎ確認、という過程を経る。そして、学校全体で図書室と読書の重要性を理解し、活動が定着した時点で英語力や学力向上のための活動（音読イベント、英語スピーチ、スペリングコンテスト、リサーチ等）が行われるようになる。ムタルメ・トゥートン学区の対象校では、TAAA事業による活動とELITSのサポートの下、時間をかけてこのようなプロセスをたどり、図書委員会を中心に継続して図書活動を行うことができるようになった。

　地域の学校では設備や物資、指導者不足により、いまだにクラブ活動・課外活動が行われていないため、生徒の興味を満たし、能力を開発する場は多くない。TAAA事業の3つの柱（図書・有機菜園・サッカー）は、生徒が自分の興味のある分野の活動に携わることができ、できるだけ多くの生徒が充実した学校生活を送る機会の創出に寄与していると言える。

（プロジェクトマネージャー　平林薫）

Page Top ▲

2018-10-14　南アフリカ

大学生の現地訪問記②　自然とともに生きる人たち

　今回、初めて南アフリカに訪れ、また農業塾や学校、周辺コミュニティへの訪問をする機会をい

ただきました。

　小学校や、農業塾では野菜の栄養に関するセッションを行いました。農業塾ではそれに加えて料理教室を行いました。栄養セッションでは、難しいビタミンなどの話を極力省いたため、とても面白かったなどの感想をいただきました。また、料理教室ではほうれん草の卵炒めと、ミネストローネを作りました。炒めるという調理法があまりメジャーではないため、その布教と、普段手に入れやすいトマトサーディン缶に野菜を加えることで栄養を摂れるようにする、また化学調味料を使用しないという目的でありました。美味しい、レシピを知りたいなどの声が聴かれたため、これからはなるべく化学調味料を使わないで料理ができるようになれば良いと思っています。

　また、私は農業大学生として、何ができるのかという思いを抱いていましたが、実際は私の方が学ぶことが多くありました。
　私は農業をビジネスとして学んできましたが、農業塾スタッフや卒業生、学校菜園にかかわる生徒たちは農業をまさに生業としているのだと感じました。生きるために作物を育て、またこれから先も自然とともに生きるために土を育てている彼らを見て、非常に感動しました。農業はビジネスではなく、人と人が助け合い、生きるためのものだと思い出しました。
　小学校菜園を耕している子供はすでに農業者であり、土を悠々と耕しておりました。農具が十分ではないため、小さなスコップで畑を掘り起こし、新たな苗を植え…。

しかし、もちろんビジネスとしての農業も重要になってくるだろうと思います。農業塾では実践的な有機農業を教えていますが、ビジネスコースでの授業をそろそろ展開しても良い頃合いだと思います。きっとこれからも良い農業者が生まれてくるのだと思うと、非常に胸が高まる時間でした。

（東京農業大学　3年　今別府映理）

Page Top ▲

2018-10-13　南アフリカ

大学生の現地訪問記①　食育の重要さ

現行のJICA草の根技術支援事業のプログラムとして、8月下旬～9月上旬にかけて東京農業大学の学生さん2名が現地を滞在し、農業塾卒業生や地域住民に交流を楽しみながら栄養指導をしてくれました。その訪問記を2回に分けて掲載します。

今回の南アフリカ滞在では現地の方と共に交流することを通して農業と食に対する興味や関心をお互いに高めたいと思い参加を希望いたしました。

8月の南アフリカ滞在に向けてどのような企画をしたら現地の方にとって充実した時間になるのか春から同じ東京農業大学の今別府さんとTAAAの久我さん、大友さんと平林さんと話し合いを進め、滞在への準備をしました。そして、現地では栄養に関する知識と野菜の調理法に関する知識を持っている人が少ないということで、栄養に関するワークショップと料理のセッションを行うことが決まりました。

滞在4日目に農業塾MOATSで栄養のワークショップと料理のセッションを行いました。料理のセッションではにんじん、じゃがいも、たまねぎ、にんにく、トマトと現地で人気のトマトベースの鯖缶を使った野菜スープとほうれん草の卵炒めを作りました。どれも今別府さん、平林さんと一緒に現地の人が簡単に作れて、煮たり炒めたりと様々な調理法を紹介できるということで、この2つのメニューを農業塾で紹介しました。参加してくれた生徒も積極的に質問をしてくれました。また、味も気に入って下さり、私たちが紹介した料理に興味を持ってくれました。後日、調理法をまとめたレシピを渡しました。

今回の活動を振り返って、栄養など食に関する教育の重要さを感じました。自分の食生活を管理することは病気のリスクを減らすことに役立ちますし、訪問した地域のように大きな病院がない環境では必要なことであると感じました。また、彼らが野菜など食べ物の栄養を学ぶことは野菜や家畜を育てることに対してモチベーションにもなりますし、農業で生計を立てる際に、消費者に野菜の健康への効果を伝えることで多くの人が食生活や野菜など食べ物に対しての意識が変わると思います。自分だけでなく多くの人が改めて自分の食や健康について考えられるいい機会になると思いました。ですから、今回の滞在で行ったように、現地の人たちが食や栄養に関する知識を得られる機会が増えると、現地の人の生活はより良くなると感じました。

（東京農業大学　4年　丸山真由）

Page Top ▲

2018-9-17　南アフリカ

南アから学ぶこと「ほんもののrespect」

図書プロジェクトの現地スタフのモンドリ・チリザさんは、「図書活動命」の２２歳だが、近所の学校の生徒達にサッカー遊びを呼びかけ、友達が友達を誘い、とうとうチームを編成できるまでの人数があつまって、始めてから１年でサッカークラブの「オーナー兼監督」にもなってしまっていた。6月視察訪問滞在中の土曜日の午後、他の地元チームとの試合を見に来て欲しいと言われ、ガラスビンの破片やゴミが散らかっていたコミュニティーサッカーフィールドだったがほぼ全員が裸足で活躍する素敵なプレイと引き分け試合を楽しませてもらった。

試合中・試合後のモンドリ監督とクラブメンバーの小中学生たちのやりとりを見聞きし、子ども達がモンドリさんをとても尊敬しているようだったので、久我さんが「子ども達はあなたのことを尊敬していますね」と声をかけると、モンドリさんは**「はい、そうです。私も彼らを尊敬していますから」**と即答。担当の図書プロジェクトでは、「図書司書の先生方の生徒に対する信頼が十分でないことが一番の問題だ」と訴えていたが、それに通ずる「相手に対する尊敬は双方向であるべき」との考えで、これは日本へ持ち帰るべき最大のおみやげだと思ったのだった。

１９５５年の「自由憲章」、アパルトヘイト廃絶のための民衆闘争、新憲法制定、真実和解委員会などからも多くを学ばせてもらった南アの人々からは、これからも学び続けることになることを実感する現地訪問となった。
（大友）

Page Top ▲

2018-8-22　南アフリカ

アパルトヘイトで寸断された農業を「生きなおしている」人たち②

一番印象に残ったのは、やはりMOATSの卒業生でダーバンの学校に通いながら、普段はお母さんに任せ、休みの時だけ畑をやっているという28歳の女性。訪問時には丁度お母さんと二人でお母さん自作の織機の前に座って、注文を受けたマット（ゴザ）の製作中だった。

私たちの訪問に、その手を止めてやや重たそうな腰を上げ、家の前に広がる彼女の畑を案内してくれた。急坂を30分ぐらい下ったところに竹やゴザの材料になる葦のようなものも繁茂する川がありそこから水を汲んで来ているという。お父さんに手伝ってもらって作ったという動物よけの竹を支柱に枯れ木で編まれたフェンスに囲まれた8畝ぐらいの畑には、ほうれん草、にんじん、タマネギ、キャベツの他に唐辛子とレモンの木が植わっていた。3色のビニールが風に舞って魅惑的な雰囲気を醸し出していた彼女お手製の案山子に注目した直後、畑を荒らしかねない山羊の小屋を畑上方に隣接させて、その底部から山羊の糞が自動的に彼女の畑のあぜ道に落ちるよう傾斜を付けたしかけには、思わず感嘆の声を上げてしまった。

さらに私たちをうならせたのは、お母さんと兄弟と同居し、2人の子持ちのシングルマザーであるやや無愛想な彼女が、なんと、ダーバンでの経営・財政学を勉強がおわったら、地元で有機農業ビジネスをやるつもりだと言ってにっこり笑ったときだった。これから18ヶ月の実習があり、学校を終了したらいずれ右側の空き地にも畑を広げたいとも。

再びお母さんとのゴザ編みに戻った彼女に別れを告げしばらく下ると、日用雑貨と日持ちする若干の食糧を揃えている小さなお店をみつけた。野菜の品揃えを確認したところ、持ちの良いジャガイモやタマネギ以外は、腐らせてしまったことがあるので置いていないと言われた。将来この店と彼女がタイアップして、新鮮野菜は彼女の家の畑で直売する仕組みをつくれないだろうかと勝手ながら夢が膨らんだ。

（大友）

Page Top ▲

2018-8-11　南アフリカ

アパルトヘイトで寸断された農業を「生きなおしている」人たち①

MOATSのトレーニングコースの卒業生や先行プロジェクトのモニタリング先で個人であるいはコミュニティーで有機農業を続けている方たち、MOATSで育てた有機苗の買い手としてファシリテーターの一人であるナチさんがリクルートした家族やグループなどを訪問する機会に恵まれた。画才があれば、思わず肖像画を書きたくなるような魅力を放っている人たちであったが、ここでは特に印象に残った何人かをそれぞれ簡単に紹介してみたい。

JICA先々行事業の対象コミュニティー菜園グループのメンバーで一時中断していたが、自分たちが死ぬ前に、子どもや孫達に自分たちの農法を伝えておきたいという思いで2018年4月に再開させていた年配グループがいた。種は農業省からもらっていたが、届くのが遅いし、キャベツはうまく育たなかったので、Coastal Farmers から買うようになったとのことだった。訪問時MOATSに注文したほうれん草の苗3箱をうけとり、若い男性3人に苗を運ばせ、牛糞を取りに行かせ、畝を作らせていた。MOATSのものは良質なので、採種するつもりだと言っていた。若者達は失業したから親・祖父母の畑に戻ってきたのかもしれない。先々行プロジェクト以来つけているという帳簿・記録も、この若者達に引き継がれて行き、自給用に販売用も若干加えながら生産を持続させていけることを期待したい。

思うところあって学校勤務から早期退職したという小学校の元校長は、MOATSの出張（オンサイト）トレーニングで有機農法を学んだ仲間といっしょに地域のシングルマザーを集め、計7人で、自宅の農地でのグループ菜園（エソムーサ＝ズル語でgraceの意味）を始めていた。収穫を自家消費用としてグループ内で分けても販売用が残るだけの規模になっていた。冬期の水確保が課題、鶏糞確保のためにも養鶏を学びたいと女性達は張り切っていた。彼女らに賑やかに歓迎され、振る舞われたキュウリ・ブロッコリー・ほうれん草で青みがつけられたヨーグルトバナナジュースの美味しい味は忘れられず、日本に帰って再現して広めている。

（大友）

Page Top ▲

2018-7-7　南アフリカ

農業塾卒業生へのアンケートとインタビュー

2016年８月に始まった有機農業塾MOATSは8コースを終え、若者を中心に112名の地元住民が卒業しました。今年4月に1コースから5コースまでの卒業生77名に対し一斉アンケート調査を実施し、6月の視察訪問では、その回答を基に卒業生訪問インタビューを行いました。　アンケートとインタビューの回答から、卒業生たちがMOATSから何を学び取り、大切にしているのかを聞くことができました。

回答から真っ先に感じ取れたことは、彼らの環境意識の高さでした。「MOATSで学んだことで一番大切なことは」との問いに対し「有機農業が土壌にやさしいこと」「土壌の微生物を殺さない農法であること」という声があり、「化学肥料を使って菜園をやっている友人には有機に切り替えるように説得している」と答えた若い女性もいました。

今後のMOATSへの要望に対しては「MOATSの野菜を孤児に配給してほしい」との声が多く挙がり、卒業生が弱い立場にいる地域住民を大切に思う気持ちが伝わると同時に、地域の厳しい現実を知らされました。ほとんどの住民が祖父母の僅かな年金に頼って生計を立てている地域です。しかし、命綱ともいえる社会保障にカバーされない層の子どもや大人は、食べていくことがきわめて厳しい。そのような層にこそ、MOATSは配給だけでなくトレーニングの場として手をさしのべていけたらと思いました。

「今後あなたは卒業生としてMOATSにどのような貢献ができますか？」との問いには、「初心者に技術を教えたい」「ボランティアワークをしてもいい」「有機農業の知識を地元住民に広めていきたい」「苗を買うことで貢献したい」などの声がありました。

MOATS卒業後、卒業生たちは各自で家庭菜園をすることになっていますが、継続していない卒業生の中断理由は、水不足、種が確保できなかったこと、獣害、就職・入学など具体的なもので、非継続者の全員が、「有機野菜は体にいいから」「家計を助けるから」との理由で、再スタートしたいと回答していました。
彼らが続けられなかった理由から地域の具体的な課題が明確になり、それらの課題対策として、今後は卒業生への再トレーニングに注力することになりました。

回答から、全継続者も非継続者もオーガニックのコンセプトをバランスよく包括的に習得していたことが分かりましたが、収穫物の販売となると、継続している卒業生でも、販売意欲はあるものの躊躇している姿が見えてきました。特に、販売のネックとして移動手段を挙げる声も目立ちました。
しかし、実際に販売している卒業生のほとんどが車はなく、地域住民に自分たちの菜園に来てもらったり、売り歩いて売っています。今回の訪問インタビューでは、車に頼らずに販売活動をしている卒業生の一覧表を見せながら、躊躇している卒業生たちに、歩ける距離での地元マーケットの可能性を考えてもらいました。
自分と同じ環境にいる卒業生たちの地元での成功事例は、大いに刺激になったようで、食い入るように一覧表を見ていました。

また「収穫物を販売したいけれども、地域住民が野菜やオーガニックの知識がないので難しい」との声も多く聞かれ、今後は生産者だけでなく消費者を増やすためにも地域住民全体へのオーガニック教育や食育が普及への鍵になるのではと思いました。　そのためにも、MOATSで有機農業の基礎知識を得た卒業生たちが、再トレーニングで野菜の栄養やクッキングを学び、その知識を地域住民に分かりやすく積極的に伝えていってほしいと思います。

彼ら卒業生は、生産者、消費者、またMOATSと有機野菜のプロモーターとして、今後地域の有機農業の普及を支えてくれる大切な資産だと、ぎっしり書き込んでくれたアンケート回答を読んで思いました。

（久我）

Page Top ▲

2018-7-18　日本

7月14日TAAA講演会レポート

2018年7月14日(土)、幡ヶ谷の「JICA東京」でTAAA講演会が開催されました。かなりの猛暑でしたが、14名の方に参加いただきました。 2時間という限られた時間の中、内容は、野田さん（事務局長）による挨拶、平林さん（南アフリカ事務所代表）による菜園支援活動事業の報告、大友さん（理事）による現地視察報告、平林さんによる学校図書支援活動事業の報告という流れで行い、盛りだくさんで質疑応答の時間がとれないほどでした。

菜園支援活動事業は「JICA草の根技術協力事業」として実施していますが、農業塾を中心にトレーニングや育苗にも注力しています。 地域の家庭菜園も支援していますが、距離の関係から指導員

が出向いています。最近は、従来参加に積極的でなかった男性が少しずつ携わるようになり、喜ばしい傾向となっています。また、リソースセンターは教室の１つを改装してつくられましたが、本の多くはTAAAから寄贈し、農業に関する本は現地で購入しています。近隣の生徒も利用しており、放課後に本を借りにやってきます。

昨年度の学校図書支援活動事業は「外務省　日本NGO連携無償資金協力」、「ひろしま・祈りの石国際協力交流財団」の支援を受けて実施しました。 菜園支援活動事業と同様、こちらも元々シャイな男子生徒が徐々に参加するようになってきました。 先生の熱意がキーの1つとなっており、先生の指導によって図書室が良く使われるようになると、成績が上がるという傾向も見られるようになってきました。 継続して算数セットが役立てられており、またパソコンを活用したIT指導も行われています。

平林さんの講演の間に行われた大友さんの視察報告は、とても具体的なエピソードから大局的な視点まで、コンパクトかつ幅広いものでした。菜園支援活動事業では、有機農法の条件が良質な種の確保と採種・育苗技術の習得であること、収穫物は自家消費と近隣販売を優先して車に頼らないこと、事業終了後は本プロジェクトを州環境省の監督下で地域組織が行うこと、という見解が示されました。また、学校図書支援活動事業では、司書と生徒の関係を改善して近隣学校で図書情報共有・ブックボックス交換・イベント開催を行うこと、州教育省との連携を強化するとともに新規支援校を検討すること、IT教育の仕上げや算数セットを活用した授業を継続することがポイントとしてあげられました。

講演会は今後も毎年定期的に開催していく予定です。ご来場いただいた皆さま、ありがとうございました。 今回予定が合わなかった方も、次回お会いできることを楽しみにしております。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

（丸岡）

Page Top ▲

2018-7-7　南アフリカ

2018年6月（17日～25日）現地プロジェクト訪問報告

今年の久我さんと大友での現地プロジェクト訪問は、JICA草の根技術支援事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」の最終年度視察に重点を置いたものでしたが、学校図書プロジェクトの状況確認なども行ってきましたので、私はその部分の報告を行いたいと思います。

昨年設置され、2人の司書担当教員に出迎えられたFundeduze Primaryコンテナ図書室は中も美

しく、使いやすく整備され、州教育省図書部門（ELITS）から配布されたものも相当数入っていました。訪問時にはコンテナの左右の角2箇所に設けられた椅子と机にそれぞれ生徒が3人ずつ座って、ブックレビューを作成しているところでした。ElITS配布図書が充実しているように思えたので、確認してみると、地域の学校の図書担当教員が集まって選書したものが配られているという、うれしい話が聞けました。

図書室・書棚・生徒の図書活動そしてそこそこの蔵書という基盤が整えば、それが呼び水となって州教育省の本来の仕事も進むのだということ、そして対象地域の学校へのTAAAからの配布が不要になる日が近いことを実感しました。今後TAAAからの本の配布は、農業塾のリソースセンターや、いままで対象としていなかった近隣地域の図書室のない学校への支援を中心に考えて行くことになるかと思います。

今回の訪問では、今後そのような対象になりそうな小学校を訪問しました。そこでは、校長の熱意で各クラスにコーナーライブラリーなるものが設置されていたものの、中身は古い、あるいは余った教科書類だったので、この学校にもELITSの本が届くように、誘い水になる日本からの本をモンドリさんが数冊ずつでも各クラスに届けることもありではないかなと思いました。現地での検討を期待します。

（大友）

Page Top ▲

2018-5-19　南アフリカ

パソコン・プログラムのリーダーたち

外務省日本NGO連携無償資金協力事業「ウムズンベ自治区の学生の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得（第2年次）」（2017年3月～2018年2月）では、図書事業の一環として20校（プライマリー8校、セカンダリー12校）を対象にパソコン基礎技能習得プログラムを行いました。

パソコン指導といってもパソコンルームにたくさんPCを並べて一度に大勢を指導するのではなく、各校にノートパソコンとプリンターを一台ずつ配置し、図書委員会生徒を中心に基礎操作を指導していきました。全対象校で940名が受講し、そのうち732名が技能テストに合格し修了証書を手に入れました。

技術を習得した生徒たちは、本の貸し記録やポスター作りなど図書委員会活動に応用し腕を磨きながら、他の生徒たちに習得した技術を教えていきました。事業終了後も、このような生徒同士で教え合うピア教育を通じて活動が学校全体に普及し根付いてきています。

一校にパソコン一台では限界はありますが、パソコンが大好きで他の生徒たちを熱心に指導する生徒たちが育ってきました。山岳地域の学校には、スティーブ・ジョブズを彷彿とさせる才能あふれるパソコン少年も現れ、指導者として大活躍しています。

「教わる側だった生徒たちが、限られた教育リソースを最大限に活用しながら、教える側になり、いつのまにかプロジェクトリーダーとして成長していった」プロジェクトで、パソコン技術だけではなく、生徒同士で教え合う習慣も育まれました。

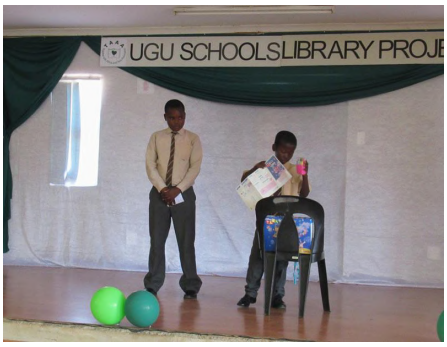
事業終了後、対象校にアンケート調査を行いました。ご覧下さい。
＞＞ 2017年度図書事業 パソコン基礎技能習得プログラム対象校のアンケート結果一覧表(PDF)

（久我）

Page Top ▲

2018-3-6　南アフリカ

2月22日図書研修会イベント



2017年度の外務省日本NGO連携無償資金協力事業の「ウムズンベ自治区の学生の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得（第2年次）」が2月28日に終了となることから、2月22日に地域内ホールで最終教師研修会および図書イベントを開催しました。当日は2校が学校の都合で欠席となったが、28校から89名の教師及び生徒が出席、ゲストやスタッフを含めて計100名が参加するというビッグイベントとなりました。

プレトリアの在南ア日本大使館より経済開発担当の有馬一等書記官が出席くださり、教師や生徒に向けて心強いメッセージ、貴重なアドバイスを頂きました。クワズールーナタール州教育省からはELITS（学校図書部門）アドバイザーのンベレ氏と、トゥートン教育センターのンクマロマネージャーが出席して読書の大切さを力説し、継続して図書活動を進めていくようにとアドバイスがあり、また日本外務省とTAAAに対する謝辞がありました。前半のイベントでは、各対象校の生徒から本の朗読や紹介、感想文や詩の発表、事業に対する印象や感謝の言葉などがありました。

余興として、ホール敷地内にあるエシバニニ小に依頼して、男子生徒によるズールーの戦いの踊りを披露してもらいました。生徒たちのダイナミックな踊りは、会場を沸かせました。

後半の研修会では、対象校の教師が校内でどのような図書活動を進めているかを発表し、事業終了後の活動継続に向けて、教師間での情報交換を行いました。プロジェクトマネージャーと図書スタッフはあらかじめ各部門の最優秀校を決定し、当日表彰を行いました。出席した教師全員に本の寄贈、生徒には本とペンを授与して最後にみんなでランチを取り閉会となりました。対象校の教師や生徒が一同に集まる機会はあまりないため、当日は出席者にとって他校の図書活動を見聞し、学び合い、刺激を与え合う貴重なイベントとなりました。

（TAAA南ア事務所　平林薫）

2018-1-28　南アフリカ

学校菜園のアンケート調査を行いました

2013年8月～2016年1月の期間に実施したJICA草の根技術協力パートナー型事業「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り」では、地域の学校40校（小学校、中学校、高校）を対象に学校菜園を作り、生徒と教師に有機農業の指導をしてきました。

それから2年が経ちましたが、学校がどのように菜園活動を継続し役立てているのか、地域への有機栽培の普及に、学校が拠点としての役割を果たし続けているのかを確認するために、一斉にアンケート調査を行いました。

今回のアンケートから分かったことを一部紹介いたします。

回答があった学校数：	38校（40校中）
• 種は学校菜園から採種している	7校
• 収穫物を学校給食に利用している	16校
• 収穫物を孤児・貧困家庭の生徒に配給	17校
• 収穫物は教師や地元住民に売り、その収益で種や菜園活動に必要なものを購入している	12校
• 学校菜園を授業に活用している	33校
• 菜園委員会生徒は、後輩や委員会メンバーでない生徒に技術指導をしている	33校
• 菜園委員会生徒たちのほとんどが、家庭菜園も行っている	35校
• 菜園委員会は活動記録を付けている	33校
• 学校側は、菜園委員会以外の生徒たちにも家庭菜園を始めることを奨励している	37校

活動を続ける上での問題として多かったのは、水不足、近所の家畜や野生動物の侵入でしたが、採種ができていないこと、思うように時間がとれないことを懸念する声もありました。菜園は、理科や生活科などの日常の授業に精力的に活用しているようで、その質問項目の箇所には、ぎっしり具体的に書かれた回答が多かったのが印象的でした。

また、菜園委員会教師たちは、技術指導だけでなく、栄養や健康などの有機農業や野菜のコンセプトをしっかりと伝えている様で、その箇所も情熱的に書かれた回答が多かったです。委員会生徒以外でも学校で習った菜園技術を家庭菜園に活かして家族に技術指導をする生徒たちが増えていることや、地元自治体から種を配布されている学校もあり、地域全体で菜園活動が普及している様子が、アンケートからは読み取れました。

一方で、採種を続けていない学校が多かったことが気になりました。今後は、現行事業の農業塾からも学校側に働きかけて、採種指導をする機会を作っていきたいと思います。　また、家庭菜園ではしっかりと採種をしている生徒たちが、自家採種した種を学校に寄附するなど、家庭菜園から学校菜園への還元の可能性も探れないだろうかと、アンケートを読んで思いました。

（久我）

Page Top ▲

2017年度図書事業　パソコン基礎技能習得プログラム対象校のアンケート結果一覧表

各対象校にノートパソコンとプリンターを1セット設置し、司書と図書委員会生徒を中心に操作技術を教える。
図書活動の一環として、図書委員会生徒たちが本の貸し出し記録に活用したり、他の生徒たちに教えていくことで、生徒たちの力でパソコン教育が継続していくことを目指す。

NO	学校名	パソコン技能習得プログラムについての感想	効果	パソコンを利用した活動	事業終了後の継続について	その他情報・コメント
Primary School						
1	INALA Primary School	校内でこれまでに行われた最高のプログラム。生徒が楽しく学びながらITの基礎的技能を習得した。	○	詩、ポスター作成、写真を使った書類作成、リサーチ、カード作り	全校生徒、特に7年生が学べるよう、学校としてパソコン増設に努力する。図書委員会生徒が本の貸出し記録をつけて	生徒の技能が向上した。IT技能は不可欠である。できればもう少し継続して指導を行って欲しい。
2	BANGIBIZO Primary	プログラムに参加できて幸運だった。生徒がテクノロジーを知ることができた。	○	科学EXPOなどのコンテストに出場する際のリサーチに利用。	より多くの生徒が学べるよう、学校はパソコン増設に努力する。	IT技能は大変重要で、生徒は早くから学ぶべきである。小学校にこのプログラムを取り入れたことは大きな意義がある。
3	IMPUMELELO Senior Primary	短期間で大きな成果があり、生徒のIT技能習得が見られた。生徒はインターネットも利用できるようになった。	○	インターネットで情報入手、DVD/CD利用、学習ゲーム	全校生徒が学べるようにしたいが、現状では資金がない。	生徒の世界を広げ、コンピューターを使って勉強や作業ができるようになった。デザイン等の創作活動も行っている。
4	WILDER Primary	生徒は楽しみながらIT技能を習得した。できればもっと指導時間が欲しかった。	○	詩、ポスター作成と作品印刷	今年度学んだ生徒が他の生徒に指導していく。	生徒はとても楽しんで学んでいたが、時間が短かった。教師も学びたかったが時間が取れなかった。
5	SIYAPHEMBA Senior Primary	生徒がITの知識と技術を学べたことはとてもよかった。	○	書類作成	まだパソコン指導を受けていない生徒を対象に指導する。	高校や上の学校への進学時に大変役立つ。
6	ICABHANE Primary	とても良いプログラム。生徒はITの基礎技能を習得できた。	○	生徒が司書教師と共に図書室の蔵書の貸出し記録作成	他の教師も巻き込み、指導をしていたい。	学校への資機材の寄贈と、TAAA指導員の生徒への熱心な指導に感謝したい。プログラムは大変効果的で、できればもう少し継続して欲しい。
7	BHEKIZIZWE Primary	生徒がコンピューターに触れる初めての機会となり、技能を習得できてとてもよかった。	○	ポスター、書類作成、インターネット、学習ゲーム	教師や学校スタッフが指導	TAAA指導員の生徒を楽しませながら学ばせる指導が大変よかった。できれば継続して欲しい。
8	KWAPHUZA Senior Primary	司書教師、生徒共にITの基礎技能を学べてとても良かった。	○	学習ゲーム、スペリング、DVD/CD利用	他の教師も含めて学校全体で生徒への指導と利用を進める。	生徒のIT技能を学びたいという意欲が見られ、多くの生徒がコンピューターを使えるようになった。

Secondary/High School

NO	学校名	パソコン技能習得プログラムについての感想	効果	パソコンを利用した活動	事業終了後の継続について	その他情報・コメント
1	SINOKUBONGA Junior Secondary	生徒の将来にとって大変重要な技能を習得でき、ITプログラムはとても良かった。	○	スペリングコンテスト等の案内や表賞状作成	図書活動、図書室利用時間を増やすよう努力し、できるだけ多くの生徒がパソコンを利用できるようにする。	学校側にプロジェクター購入を申し出たが難しいため、ファンドレイジングをする予定。とても良いプログラムなので、できればもう少し継続して欲しい。
2	BONGUCELE Junior Secondary	生徒がITの基礎的技能を身に付け、実践することができて良かった。	○	書類作成、蔵書の貸出し管理	今年度指導を受けて技能を身に付けた生徒が他の生徒に指導する。	多くの生徒はITに関する知識を全く持っていなかったが、他の生徒に教えられる生徒も出てきた。
3	KWA FICA High School	生徒がパソコン指導を大変喜び、多くを学んだ。プログラム終了後に証書を得たことは生徒の自信となった	○	リサーチや課題の書類作成、インターネット	プログラムを修了した生徒が他の生徒に指導する。	とても良いプログラムなので、できれば継続して欲しい。
4	LUTHULI High School	生徒がITの基礎的技能を身に付けることができて良かった。	○	履歴書作成、進学準備のための情報入手	教師及び技能を身に付けた生徒が他の生徒に指導する。	生徒は基礎的技能を身に付けたので、今後は自分でコンピューターを使いこなしていくことができる。
5	SIBONGIMFUNDO High School	生徒が楽しくIT基礎技術を学び、高校卒業後の準備となった。	○	書類作成、特に12年生が大学情報と応募に利用	教師及び技能を身に付けた生徒が他の生徒に指導する。	生徒が卒業後に大学等で勉強や書類作成などをするための準備ができて良かった。
6	KHANYA High School	インターネットでの情報収集方法や履歴書の書き方を学べてよかった。	○	リサーチや課題の書類作成、履歴書	生徒がパソコンを利用したいときにいつでも使えるようにして、技能を習得した生徒が他の生徒に指導	とても良いプログラムで、生徒が熱心に取り組んだ。
7	BONGUZWANE High School	多くの生徒にとって念願だったIT技能習得ができて良かった。	○	履歴書作成、スピーチやプレゼン原稿作成	技能を身に付けた生徒が新しいグループの生徒に指導する。	生徒に興味を持たせるプログラム。12年生がインターネットで大学情報入手や応募ができた。
8	SIBONGUJEKE Secondary	IT技能習得プログラムに参加できたことを感謝している。	○	学んだことの実践	教師及び技能を身に付けた生徒が他の生徒に指導する。	生徒は学校にパソコンが配備されたこと、将来のための重要な技術を身に付けられたことをうれしく思っている。
9	KHATHI High School	生徒のIT技能向上が見られ、プログラムは効果的だった。	○	書類作成	コメントなし	スタッフの指導がよかった。
10	BHEKAMANDELU High School	生徒が大変喜び、指導はコンピューター技能習得に役立った。	○	図書室蔵書の貸出し管理、履歴書	技能を身に付けた生徒が他の生徒に指導する計画を立てた。	とても良いプログラムで、生徒がパソコンを使いこなせるようになった。多くの生徒が利用できるよう、できればもう一台欲しい。
11	GEORGE MBHELE High School	生徒及び教師双方の学びとなった。	○	課題の書類作成、リサーチ	生徒と教師双方で利用	現在、教育現場にはテクノロジーが不可欠で、時代に沿ったプログラムである。
12	SIBUKOSETHU High School	とても良いプログラムで、生徒が情報にアクセスできるようになった。	○	書類作成と印刷	コメントなし	進歩的なプログラムで、情報入手や生徒の能力開発に役立った。